東奥日報2026年10月23日(金)付掲載

つなぐ 私たちの祭典 ①
2年目を支える

青い海と森の音楽祭
10/31−11/8

「弘前温清園」利用者ら

「また聴きたい」生き生き



弘前市の養護老人ホーム「弘前温清園」の利用者・中野宮子さん(80)は、ソプラノ歌手の隠岐彩夏さん(五所川原市出身)の歌声に再び触れる日を楽しみにしている。同園は昨年、「青い海と森の音楽祭」でアウトリーチ(出前演奏会)の会場となった。「こうも声が響くのかと思った。感動した」。その時隠岐さんが歌った童謡「この道」を、中野さんは今も忘れられないという。

隠岐さんや指揮者の沖澤のどかさん(青森市出身)ら音楽家が生み出した響きに利用者らが魅了された。今年の音楽祭は同園から10人以上が弘前市のオーケストラコンサート(11月6日)を聴きに行く予定だ。

「指揮者も歌手も、みんな素晴らしかったわよね」。音楽祭の開幕が近づく10月中旬、同園で利用者たちが昨年の写真などを見返しながら思い出を語り合っていた。

「歌謡曲とかは聴いていたけどクラシックには接したことがなかった。でも素晴らしかった」と話したのは北野トミ子さん(86)。アウトリーチでは聞き覚えのある曲もあり、「気持ちが明るくなった」という。

園では地元の交響楽団などの演奏会に利用者を連れて行く機会が増えた。竹村亜矢子園長は「音楽は年齢に関係なく心を動かされるもの。施設に来てよかった—と思ってもらえるように日々仕事をしているので、楽しみが増えたことは心強い」と利用者の姿に目を細める。

冠者尚子さん(91)は今回初めてホールでオーケストラの演奏を聴く。「響きがいいんでしょうね。弘前だと行きやすくて助かる」と笑顔。中野さんは「弘前の公演で隠岐さんたちの顔が見たい。元気かな。楽しみにしています」と親しみを込めた。

(秋村有香)

◇

2年目を迎える青い海と森の音楽祭。音楽を通して人の輪が広がり、つながり、さまざまな形で9日間の祭典を盛り上げる。31日の開幕を心待ちにする人々の声を聞いた。

※連載は5回続きです。

昨年のアウトリーチの思い出を振り返る(左から)北野さん、竹村園長、中野さん、冠者さん=10月中旬、弘前市の弘前温清園

【公式グッズ箱詰め26面】

無断での複製・転載・生成AI利用を禁じます